

発表「ウィズコロナ時代の文字通訳」

2020年8月29日

特定非営利活動法人全国文字通訳研究会
大場美晴

1. はじめに



こんにちは。全国文字通訳研究会の大場美晴です。
今日は主役の筑波技術大学 若月先生の露払いとして
30分ほどお話しさせていただきたいと思います。

ソフトの名前や機能の名前などカタカナ語がいっぱい出
てきますがご容赦ください。こういうITの世界のことは別の
言葉に言い換えると、かえって分かりにくくなるようなので、
正しい名称を使ってお話しします。

きっかけはコロナ

2020年の春、新型コロナウイルス感染拡大の影響でリアルに集まって会合をすることができなくなりました。世の中はテレワーク、オンライン授業… とオンライン化が一気に進みました。進みました、というか、進んだ人は進んだ。でも、置いてけぼりの人は置いてけぼりのままという気がします。

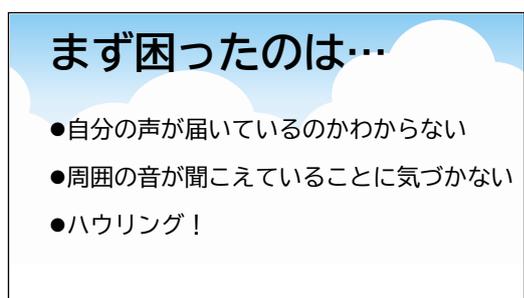
聞こえない人と聞こえる人が一緒にオンラインでミーティングを行うとき、情報保障はどうするんだろう。みんな、ノウハウがあるわけじゃないよね。このままではみんな取り残されてしまう。何より8月に開催する予定の夏季集会ははどうしよう…。

そこで文字通研で始めたのがZoomでのミーティングでした。皆さんに教えていただきながら、ほぼ毎週日曜日に実施してきました。初めて体験するという方が多く参加してくださいました。また、入力者たちで集まってオンライン練習会も実施するようになりました。

回を重ねるごとに増えてきたのが、オンラインミーティングに参加するときいろいろな困りごとがあるということでした。また、文字通訳や手話通訳もリアルな場での通訳とは勝手が違う、課題があることがわかってきました。

遠隔で情報保障をするというのが実は何年も前から行われていました。最も利用者や支援者が多いのが教育分野だと思います。専用ソフトウェアもありますし、全国的に活動する入力者グループも複数存在します。私も教えてもらうことが多くありました。特にPEPNet-Japan = 日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワークの情報は大変参考にさせていただきました。ありがとうございました。

2. 参加の妨げになるもの



聞こえない人と聞こえる人が一緒にオンラインでミーティングを行うとき、妨げになることがたくさんありました。

まず困ったのは、自分の声が届いているのかわからないんですよ。

Zoomの設定画面やWindowsのコントロールパネルなどで声がマイクに入っているかは確認できますが、相手に届いているかどうかはわかりません。

ちゃんと設定してるはずなのに、聞こえない、どうしよう…

ということがよくありました。ですので発言するときに「私の声が聞こえますか？」と言ってから話し始めるという人が多くいらっしゃいます。

また、周囲で音が出ていることに気づかない。たとえば家族がテレビを見ているとか、家の外を走るバイクが走っているとか。ですので、Zoomに参加したらまずマイクをミュートに。発言しないときだけオンに、というふうにさせていただきました。

あと、ハウリング。パソコンを2台持っていて2台目でZoomに入ろうとすると、どちらかのオーディオを切っておかないと(オーディオから退出しておかないと)ハウリングがおきます。

次に困ったのは…

- 顔がよく見えない。手話が見づらい。
- 進行に取り残される。
- 発言のきっかけを逸してしまう。
- 同時に話さないで！
- なんか、すごい疲れる。

音の問題の次に困ったのは、映像です。

逆光で顔がよく見えない、手話の動きが見づらいということもありました。複数の人が手を動かすと、どれを見ればいいのかわからなくなる。

情報保障があっても、それだけでは十分ではないようです。

タイミングを図ることが難しく、どうしても進行に取り残されてしまいます。今、誰が話してるの？ 発言権は誰にあるの？ 自分は今、手を挙げてもいいの？ …そうこうしているうちに発言の機会を逸してしまう。なので、文字通訳者が話者名を出してくれるのはとても助かる、とのことでした。

文字通研のZoomミーティングでは必ず文字通訳や手話通訳を参加者の助け合いでつけています。チャットで情報を出す人もいます。手話で話す人もいます。そうすると、見なければいけないところがたくさんあって、かえって大変なのではないかと思えます。

そんな状況になると、つい複数の人が同時に話してしまう。文字通訳者としては、やめてー！ という感じです。

進行役は必ず必要のようです。意思表示をしてもらって、指名されたら話す。この約束事が大事ですし、取り残されている人がいないように進行役がしっかり目配りしないといけないことだなと感じています。

そんな感じで、オンラインのミーティングは、リアルに顔を合わせて行うミーティングに比べて、すごく疲れるような気がします。ずっと画面を見続けているからでしょうかね。なので休憩は多めにしないといけません。今日のウェビナーでも、3時間の間に2回休憩をいれます。

(本番ではカットした話)

一方でいいこともあるよという話も聞きました。話す人がしっかり前を向いて話してくれるので口の動きが読める。これはリアルな会議ではないことですね。自分が聴覚障害者であることが周りに知られることがなくて気持ち的に楽だというご意見でした。

入力者として気がついたこと

入力者として気づいたこと

- 利用者の様子がわからない
- 連係入力のタイミングが合わない
- チームワークがとりにくい
- 地域ごとの独自ルールの調整
- トラブル時にどうするか

遠隔で入力してみて気づいたこと、困ったことをまとめました。

まず、利用者がどんな様子なのかわからないということ。対面ならばニーズを聞いて表示のしかたや要約の加減など調整できますが、それができません。

次に、連係入力のタイミングが合わない。一時期、お笑い芸人がオンラインで漫才をしたのを見たのですが、どうもタイミングがほんのちょっとずれてて笑えない。それと同じで、連係入力でも2人の入力がぶつかって

しまう頻度が多いように思います。

チームワークがとりづらい。通常のリアルな現場だと4人1組などのチームで助け合うわけですが、それがなかなかやりづらいということです。

地域ごとの独自ルールの調整。遠隔だとどこに住んでいても入力に参加できますから、ふだん自分が入力している地元のルールとは違うルールに出会うことになります。それはとても細かいことだったりするんです。たとえば改行はどうするかとか、カギカッコはどういうときにつけるとか。そこをちゃんと調整してからでないとうまく関係性はうまくいきません。

また、遠隔入力だとトラブルがつきものです。通信のトラブル、マシンのトラブルなどなど。そういうときにどういう連絡手段をとるのか、バックアップ体制はどうするのか、主催者は、利用者は、通訳者同士は…。これらこのことを事前にしっかり決めておく必要があるようです。たとえばZoomのほかにもLINEやSkypeでつないでおくといった工夫があります。

社会的な課題

社会的な課題

- 遠隔の通訳派遣にまだ対応していないところが多い。
- オンラインならではの通訳の倫理は？
- 記録の取り扱いは？

次に、社会的な課題についてです。

オンライン会議への通訳派遣にまだ対応していない地域が多い。これは早く体制が整備されるのを待ちたいところです。

それから、リアルの方の通訳とは違ったオンラインならではの通訳の倫理が必要になってくるのではないかと思うのです。たとえば家族がいる場所で入力しているのか、ホントに自宅なのか。街中のカフェでもできちゃいますからね。公

共のWi-Fiを使ってもいいのか、などなど。

それから、利用者が自分のパソコンを操作しますので、自分でログを保存することができちゃいます。主催者側があらかじめ保存できない設定にすることができますが(今日のウェビナーもそういう設定ですが)、画面を録画することだってできちゃうわけです。

利用者も入力者も、改めてオンラインならではの約束事、契約のようなものが必要になるわけで、こういったものも早く示されるようになってほしいと思っています。

ただ、逆にね、整備さえされれば、オンラインって交通費が要らないし、移動時間もなくなってコストの負担も減るので、通訳者が現地に赴かない遠隔型が増えてくるのではないかという意見もあるわけです。入力者も地域にしばられない活動が可能になりますし、これから先、どんなふうになっていくのか、私にはなかなか考えが及びませんけれども。

3. Zoom ミーティングでの情報保障のスタイル

さて、Zoomミーティングで文字通訳や手話通訳を行うには、いくつかのスタイルがあります。

文字通訳では、大きく分けてZoomの中の機能だけを使った簡易的な方法と、専用ソフトを使ってしっかり関係入力する方法があります。

情報保障のスタイルいろいろ

- ①Zoomの「チャット」
- ②Zoomの「クローズドキャプション」
- ③別の遠隔情報保障システムとの組み合わせ：
「IPtalk」「captiOnline」「T-TAC Caption」など

Zoomの機能には、「チャット」と「クローズドキャプション」があります。

別の遠隔情報保障システムとの組み合わせに使えるソフトは、「IPtalk(アイピートーク)」、「captiOnline(キャプションライン)」、「T-TAC Caption(ティータックキャプション)」などがあります。

①Zoomの機能「グループチャット」



Zoomで文字でコミュニケーションをとるとき一番簡単なのが「グループチャット」です。チャット、つまりおしゃべり。誰でも入力できる文字によるおしゃべりですね。

「チャット」というアイコンを押すだけでウィンドウが現れて、すぐに入力できます。自分で発言したいことをここに入力してもいいし、誰かの発言を誰かが入力してもいい。筆談やノートテイクのような使い方ができます。

②Zoomの機能「クローズドキャプション」



Zoomにはもう一つ、「クローズドキャプション」、つまり字幕を表示する機能があります。

表示したい人が自分で表示をオンにします。画面の下の「CC」というアイコンから「サブスクリプトの表示」をすると表示させることができます。

ちなみに先日までメニューの名称が「字幕」だったんですが、バージョンアップして「クローズドキャプション」に変わりました。

この「クローズドキャプション」、画面のすぐ下に出てきますので視線移動が少ないのがいいところです。

文字の大きさは各自、Zoomの設定で小から大まで3段階に変えることができます。ただし、一度に表示できるのは3行までです。たいていは1～2行でしょうか。じっと見ていないと見落としてしまいます。

さらに困ったことに、入力できるのは一人だけなんです。ホストが指名した人に入力窓のようなものが表示されて、その人が頑張って入力する。ちょっと大変ですね。

そこで、この後お話しする「captiOnline」の登場なんです。

Zoomへは「captiOnline」や「UDトーク」などの外部で入力したものをこのクローズドキャプションに送ることができます。「captiOnline」では連携入力できてチームで助け合えますので質の高い字幕を出すことができます。今も入力してくださっています。今日のメンバーは4人です。ありがとうございます。



この「クローズドキャプション」、ずっと見ていないと見落としてしまいますし疲れます。そこで、履歴を表示させてさかのぼって読めるようにする機能があります。

その履歴のことをZoomでは「フルトランスクリプト」、または「トランスクリプト」という名称になっています。

アイコンから「フルトランスクリプトの表示」を選ぶと表示されます。

③「captiOnline」を Zoom 画面の横に並べる



Zoom ミーティングの情報保障としてもう一つのスタイルが遠隔で情報保障システム「captiOnline(キャプションライン)」をブラウザで表示して、Zoom 画面の隣に並べる方法です。

たとえば現場でIPTalkの文字通訳をスクリーンに映し出すよね。あれと同じようなものが自分のパソコンのインターネットブラウザで見ることができるのです。

やり方は、主催者からcaptiOnlineのURLやユーザ名、パスワードが送られてくるので、クリックしてそれを入力するだけ。するとインターネットブラウザが開いて字幕が表示されます。(注: ブラウザはGoogle Chromeが推奨されています。Internet Explorerでは動作しません)

この方法のいいところは、文字の大きさ、文字の色、背景の色など自分好みにできることです。画面左上にカーソルを当てると、うっすら三本の横線が見えると思います。これをクリックすると設定画面が出てきます。

④「captiOnline」をスマホやタブレットで見る



「captiOnline」の字幕はスマートフォンやタブレットでも読むことができます。パソコンでは Zoom、字幕はスマホといった使い方が結構いい感じだと思います。

主催者から送られてきたURLをSafariやGoogle Chromeなどのブラウザで開くのは先ほどのお話と同じです。入力が面倒なのでQRコードにして読み込んでもらうようにすると利用者は楽です。

⑤さらに高度な表示も



もし画像を合成する機械があれば、複数の画面を合成して Zoom に送ることができます。たとえばこの図は手話と「captiOnline」を横に並べたものです。全員に同じものを見せたい場合は Zoom で「画面共有」といいでしょう。

ただ、この方法は、技術的にも金銭的にも主催側の負担が大きいです。

利用者としても文字のサイズなど自分好みの表示にすることはできません。

4. 本日の情報保障の説明



今日の画面についてご説明します。

「captiOnline」による文字通訳の画面、手話通訳の方の画面、講師の画面、プレゼン画面。それぞれのアカウントを4つ並べているだけです。配置の並び順はZoomではコントロールできない(2020年8月現在)ので、そのときどきによって変わったりします。

「captiOnline」からZoomに送っているの、画面下の「クローズドキャプション」に同じ文字を出しています。

専用の機器を使って画面共有すればもっとスマートにもっとかっこよく合成画面を作ることができますが、今回はあえて特別な機材がなくてもできるシンプルなものをお届けしています。つまり、特別なものがなくてもこういう工夫ができますよ、とお示ししたかったからです。ここまででしたら、皆さんもすぐに真似していただけます。

(本番ではカットした話)

この図の左上、文字通訳の画面は、先ほどからお話している「captiOnline」を使っていますが、それを「OBS Studio(オービーエススタジオ)」というライブ配信用のソフトでZoomに表示させています。よくYouTubeなんかでゲーム攻略の実況を流している人がいますよね。そういうときに使われているソフトだそうです。フリーソフトなのでタダです。

5. オンラインで連携入力できるソフト

遠隔で連携入力する

- ・ IPTalkなどの入力ソフト
- ・ ウェブベースの情報保障システム

入力者がオンラインで連携入力できるソフトがいくつかあります。

大きく分けると、IPTalkのように専用ソフトをインストールして使う方法、そしてウェブブラウザ上で動作するもの、この2つがあります。

代表的なものを簡単に紹介していきます。



画像出典: IPTalk公式サイト

まずは皆さんおなじみ、「IPTalk(アイピートーク)」です。
(本番ではカットした話)

リアルな現場ではハブとLANケーブルで入力者をつなぎますが、オンラインで使うときはVPNという仮想ハブを使います。また最近のバージョンアップで「WebConnect(ウェブコネクト)」というVPNを使わない方法が追加されました。

さらに、こんなふうに透明にしてパソコン画面に表示できる機能が加わったそうです。



画像出典: PEPNet-Japanホームページ

筑波技術大学の三好先生が開発された「T-TAC Caption(ティータックキャプション)」はウェブで動作する遠隔情報保障システムです。教育現場で多く使われているそうです。

(本番ではカットした話)

個人への貸与は行っておらず、利用するには学校や情報保障者団体として登録する必要があります。



うことなく使えると思います。

そして、本日の主役、筑波技術大学の若月大輔先生が開発された「captiOnline(キャプションライン)」です。

こちらもウェブ上で動作する遠隔情報保障システムです。

(本番ではカットした話)

captiOnlineは入力者にとっては助かる機能が豊富です。たとえばFキーで文字列を出せたり前ロールを出せたりと、IPTalkに似た機能が多いので、IPTalkを使える方は迷

6. 手話の工夫

手話の工夫

- ・表示のしかた（画角、顔や手の明るさ）
- ・手の動き（ゆっくり・はっきり）
- ・どうやって交代する？



手話についてもお話しておきたいと思います。

表示のしかた、つまり、画角を広く、顔や手にちゃんと光が当たるようにする工夫が重要です。

手の動きはゆっくり・はっきり出さないと、画面がぶれてしまったり読み取れません。

（本番ではカットした話）

また、手話通訳の交代のしかたが難しいのです。手話通訳が2人いて、1人が担当している間、もう1人はカメラをオフにしています。交代するとき、どういう合図をするのか。声を出していいことにするか。そしてカメラをオフに、もう1人がオンにします。そうすると、今のZoom(2020年8月現在)では表示の位置が変わってしまいます。もしも参加者が手話通訳だけを見たいと思って「画面の固定」をしていたとしたら、固定の対象をそのたびごとに変えないといけません。

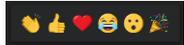
また、手話通訳側も、たとえば参加者の一人が手話で発言してその読み取り通訳をしようとしたとき、参加者が多いと誰が話しているのかわからないといったことも起きます。

そういったルールやノウハウもこれから決まっていくのかなと思います。

7. こんな工夫も

こんな工夫もあります

- ・意思表示のうちわ
- ・情報保障者に感謝の「拍手」



こんな工夫もありますよ、というものをご紹介します。

まず、「発言があります」「質問です」「賛成です」など、意思表示をするためのうちわを使うというアイデアです。スケッチブックでもいいんですが、うちわだとバーチャル背景を使っているときでも消えにくいようです。

これは進行役としてもわかりやすく、なかなかありがたい工夫です。

また、文字通研のZoomミーティングの最後には、手話通訳・文字通訳を担当してくださった方に感謝の気持ちを表す「拍手」のアイコンを出しています。「反応」というアイコンから出すことができます。みんなで一斉にアイコンを出すと、画面に花が咲いたようでとてもいい感じです。

8. オンラインミーティングの参加を保障するポイント

参加を保障するポイント

- ・進行役の役割が重要。発言は指名制
- ・注目する画面が変わるときは必ず合図
- ・参加者全員がお互いに配慮すること

取り残される人を出さないようにするために、何が必要か、まとめました。

まず、進行役が必ず必要です。発言したい人には手を挙げるなどの意思表示をしてもらう。指名されたら発言する。これを必ずみんなが守ることが大切です。

そして、注目する画面が変わるときは必ず合図をすること。参加人数にもよりますが、ギャラリービューで見ている人もスピーカービューで見ている人も、特定の画面を

固定して見ている人もいます。それを念頭において、必ず声や文字で合図をする時間をとることが必要です。つまり、参加者全員がお互いに配慮するということです。

参加を保障するポイント

- ① 話す人は最初に自分の名前を名乗る
- ② 同時に話さない
- ③ 通訳が終わるまで**みんなで待つ**

文字通研の Zoom ミーティングでのルールです。

- ① 話す人は最初に自分の名前を名乗る
- ② 同時に話さない
- ③ 通訳が終わるまでみんなで待つ

この「みんなで待つ」というのが大事ななと思っています。

9. まとめ

まとめ

コロナが終わってもオンラインは終わらない
取り残される人を出さない明るい未来は…

新型コロナウイルス、いつ終わるんですかね。ため息が出ちゃいます。いずれにしても、いわゆる「新しい生活様式」はしばらくまだ続くと思います。

世の中の人にはオンラインの便利さを知ってしまったので、もう後戻りしないと思います。

だから今、取り残される人を出してはいけないと思うんですよね。みんながそんなふうを考えて行動したら、今とは違った明るい未来が見えるような気がします。

(本番ではカットした話)

あと、ITの世界は日進月歩で、次々に新しいものが登場しています。こういうのがほしいな、こういうのがいいなと声を上げれば、もっといい方向に向かっていくような気がしています。

以上で発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

以上